

現代の体育・スポーツの指導者とその在り方への提言

小倉 美津子

一九五〇年に開催された東京オリンピック夏季大会を契機に、わが国の体育・スポーツは大きな変化をきたした。戦後の体育・スポーツが、欧米の体育・スポーツ思想やその現実を参考にしながら、一定の方向性をもって着実な歩みをしていくことは事実であるが、体育とスポーツがその目的、実践の仕方、評価などの面で一線を画して、お互いに相入れないものであるかのような扱われ方になっていったといつても過言ではないと言えよう。個人を主体とした勝ち負けのはつきりする競技や形式の教材や展開は良くない。トレーニングや鍛練形式の扱いは良くない、など競技スポーツには不可欠の要素を体育では受入れられないとしていた。このため、競争や競技を避けた身体活動が体育とされていたのである。一方スポーツ界はオリンピックを頂点にして、各種の世界的大会での成績がふるわず、世界に悟して対抗する競技力はほとんどない状況にあった。その打開策として競技力を高めるための合同練習や合宿トレーニングなどを頻繁に実施するとともに、当時は大学生主体のスポーツであったのを社会人（実業団）に焦点を当て、

実業団リーグ戦や日本リーグ戦などを誕生させ、競技力向上のための導火線を引いた。その成果は東京オリンピックで花を咲かせたことも事実である。しかし、先にも述べたように、体育とスポーツとの間に連携がなく、いわゆるスポーツ人口の増大には至っていなかった。

あの東京オリンピックで、諸外国の選手の体力と競技力を眼のあたりにして、日本人の体力のひ弱さを痛感させられたし、体育のあり方が問われ、競技志向層の層の薄さを知り、体育・スポーツに関する科学的研究の不十分さやその実践化の不足などを知らされたのである。

その結果として、体育・スポーツに関する各分野で多様な具体的な方策が講じられた。まず学校体育では、昭和四三年（一九五三年）に小学校学習指導要領が改訂され、「道徳教育や体育を一層重視し、知、徳、体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成。」を柱として、総則には「学校における体育に関する指導は、学校の教育活動の全体を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上及び健康・安全の保持増進については、体育科の時間はもちろん、特別活動などにおいても

十分指導するように努めるとともに、それらの指導を通して、日常生活における適切な体育的活動の実践が促されるよう配慮しなければならない。」としている。この他にも、教材の領域もスポーツの類型に集約されるなどの改革として表われた。その後の中学校学習指導要領や高等学校学習指導要領にも同主旨の改訂が実施された。このように、体育の代表格としての学校体育が、質的にも量的にも東京オリンピックに学んだ点を重視して展開されることになった。

一方、社会体育の分野では、一九四八年に西ドイツのスポーツ・ユンゲントを参考にしてスタートさせたスポーツ少年団を組織的にも活動内容でも、飛躍的な発展を遂げることになる。また、同様の主旨を東洋の魔女と形容されたバレーボール日本女子チームの優勝などが相乗的に効果し、家庭婦人バレーボールが爆発的に普及振興をみたのである。この家庭婦人層のバレーボールの振興は、家庭婦人層にソフトボール、テニス、バドミントン、軟式庭球、卓球などへの愛好者の増加に結びついて、今日の状況へと発展してくるのである。加えて、家庭婦人層のスポーツの参加、参画が、老若男女を問わず多くの人達にスポーツ意識を喚起させたとも評されている。

このように、東京オリンピックを契機にして、わが国の体育・スポーツは大きな変化をみたところであり、その後のわが国の経済の発展と世相の変遷等に伴って、国民総スポーツ時代とも言われる昨今の状況を呈することに結びつくのである。スポーツ産業三兆円時代、完全週休二日時代・長期休暇取得時代、感性から感動の時代、ほんまもの志向時代などと評される昨今であるが、これらの評はすべてスポー

ツに係わる要素を備えており、いよいよスポーツへの関心の広まりをみることは必定とも言える。わけでもレベルの高い競技スポーツへの関心の高まりは、プロスポーツへの観客の動員数の激増や最高水準のアマチュアスポーツへの観客の動員などとともに、これらの競技やゲームのテレビ視聴率の高さが証明している。

しかし、一九八八年に開催されたソウルオリンピックでのわが国選手団の不振や世界的大会での不振は依然と続いている。このような状況は、スポーツ関係者のみでなく大多数の国民からも一種の憂いとして受け止められている。この原因を関係者は次のような点にあると考えている。

- 。一部の競技適性体力を除き、一般に体力が劣っていること。
 - 。スポーツに関する科学的研究の遅れ。
 - 。指導者の資質と指導に当るための諸条件の不備。
 - 。トレーニングのための施設（一般にナショナルトレーニングセンター等と称されている。）の不整備。
 - 。選手がトレーニングに精励するための生活諸条件の不十分さ。
- などが掲げられている。

専門家が分析するこれらの諸条件を整備してこそ、わが国のスポーツ水準は高められることになることは言を待たない。その対応として国ではスポーツ医科学センターの調査研究に入っているし、ナショナルトレーニングセンターの整備構想も検討に入っている。また、五〇〇億円を一つの用途にしたスポーツ基金の設置と造成就が急がれているとともに、競技力の向上を大きな柱とした日本オリンピック委員会の

日本体育協会からの独立組織化（法人化）など、多角的に進められている。指導者の確保と養成についても、一部にはあるが活動費の援助や身分保障の制度化などとともに、国の手によってスポーツ指導者の認定制度も設けられるようになった。

しかし、選手と同様に優秀な資質を備えた多くの指導者を必要としながら、指導者に係る諸対策を講ずるための基礎研究は進んでおらず、指導者の養成と確保の抜本的な方途が明らかになっていない。優秀な指導者を得てこそ、優秀な選手が輩出できることは必然であり、多くの事実がそのことを証明している。この様に大切な指導者の育成や確保については、実績主義が中心で、一度日本一の選手やチームを育てあげた指導者は優秀であり、いつまでもその位置や立場に君臨することとを認められてきたのがわが国の歴史である。しかし、最近では比較的若く指導経験も少ないと思料される指導者が素晴らしい選手やチームづくりに成功しており、指導者のあり方に一石を投じている。これらの点に着目し、優秀なチームづくりのための指導者のあり方についての分析的研究が待たれている。

そこで優秀なスポーツ指導者のための必須条件を究明し、多くの優秀な指導者を輩出することに資するための研究を進めることとした。

今回は、高校生の指導に当たっている指導者のうち、野球、サッカー、ラグビーの男子競技三種目を選び、その日本一を育成した当時の暦年令の実態を分析するとともに、若干の考察を加えたので報告する。

一、調査対象

。全国高等学校野球（硬式）選手権大会（夏の大会）に参加した各チームの監督（兼コーチを含む）を対象とした。対象の範囲は一九七五年～一九八九年とした。

。全国高等学校サッカー選手権大会に参加した各チームの監督を対象とした。対象の範囲は一九七九年～一九八九年とした。なお、一九八九年は昭和六三年度大会として、以前の大会も同様の扱いとしている。

。全国高等学校ラグビー選手権大会に参加した各チームの監督（兼コーチを含む）を対象とした。対象の範囲は一九八五年～一九八九年とした。なお、年度の扱いはサッカーと同様とした。

二、結果と分析

調査は参加全チームの監督（兼コーチを含む）の暦年令について行った。その調査した年令を参加年次別に、全員一回戦での勝者・敗者別・同様に二回戦、三回戦、四回戦、五回戦、六回戦の勝者・敗者別に、その平均年令を把握した。先ず参加全監督の平均年令と偏差値内の分布を示したのが、野球（図一）、サッカー（図二）、ラグビー（図三）である。

野球の場合、過去十五年間の年次別の参加監督の平均年令は、年次毎に多少の上下はあっても、十五年を通してみると常に三八、九才～四三、四才の間にあり、偏差値も六・八才～十・一才の範囲にある。回帰係数も〇・〇七とほとんど変化の無いことを示している。このこ

図-1 野球の全参加監督の平均年齢と±1 偏差分布

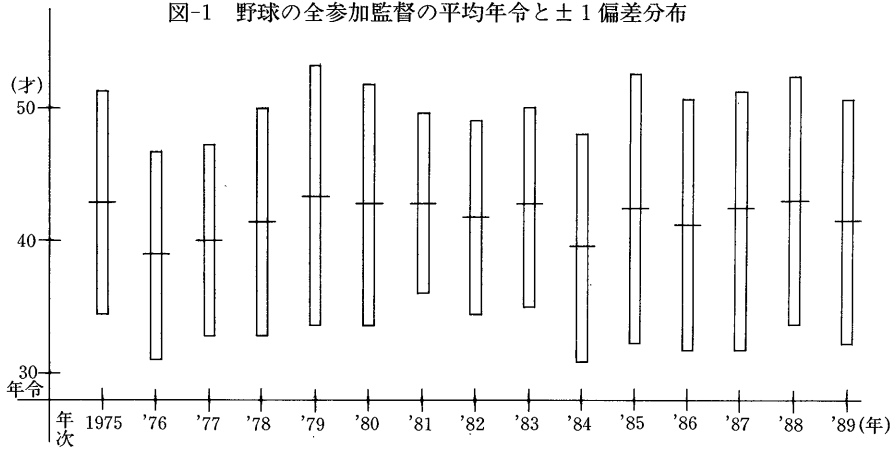


図-2 サッカーの全参加監督の平均年齢と±1 偏差分布

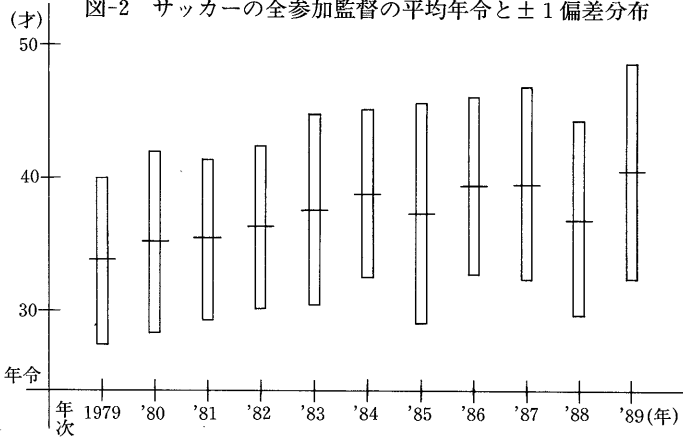
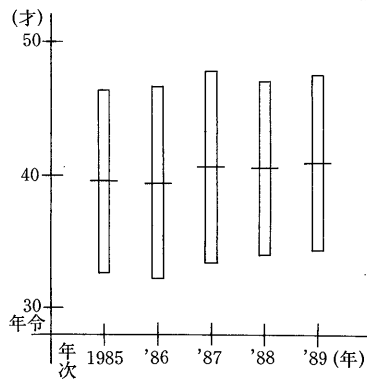


図-3 ラグビーの全参加監督の平均年齢と±1 偏差分布



とは、高校野球の都道府県代表チームの指導者は、十五年間に渡ってその年令に変化のないことが明らかであり、また、その偏差値もほぼ同程度で推移していることからみて、参加監督に常に新陳代謝のあることになる。ただ、一九七六年～一九七九年にわたる四ヶ年間で一九八六年～一九八八年にわたる三ヶ月年間には、ほぼ一才きざみの平均年令の上昇があるため、参加全監督の追跡調査をしたが、同一監督の連続出場は最高年次で三名であった。このことから監督の新陳代謝のあることを証明した。

サッカーの場合、十一年間の年次別の参加監督の平均年令は、年を追う毎に若干ではあるが高くなってきたことを示した。その高年令化の回帰系数は〇・五一となっており、約二年に一才の上昇となっている。年令の広がりを見る偏差値は、最高が八・三才で最低が六・一才であり、全般にその振幅に差異はみられなかった。平均年令が漸次高まりを見せているため、同一監督の連続出場を個別に調査した結果、野球とは様相が異なり、約二七％の参加チームの監督が連続して参加している年次を最高にして、最低でも一八％の監督が連続して参加していることが判明した。しかし、サッカーの監督の平均年令は十一年間の全平均で三七・九才となっている。

ラグビーの場合、過去五ヶ年間の資料分析のため、その根拠性は薄いが、全体において平均年令は野球に近く、年次傾向ではサッカーに近い様相を呈している。

次に全参加監督の平均年令、本大会における一回戦での勝者監督と敗者監督のそれぞれの平均年令、同様に二回戦以降についても同様の

分析をして一覧にしたのが、野球（表一）、サッカー（表二）、ラグビー（表三）である。これらのそれぞれを判読しやすくするため図示したのが、野球（図四）、サッカー（図五）、ラグビー（図六）である。

野球の場合、一九七九年、一九八〇年、一九八五年の三つの大会では、全参加監督平均年令より若い監督が勝者となり、その他の年次の大会では、そのほとんどが全員平均よりも高年令の監督が勝者となっているケースが多い。また、三回戦、四回戦（準々決勝）、五回戦（準決勝）、六回戦（決勝）と勝ち進むに従って、高い年令監督が勝者となっているケースが多い。このことは、準決勝・決勝の勝者に顕著に表れている。この準々決勝・準決勝・決勝の勝者・敗者別の年令をプロットしたのが図一七、図一八、図一九である。このように、準々決勝では、平均年令との対比においてほぼその分布はきつ抗しているが、勝者・敗者別では●印で示した勝者が一般に高年令であることを示している。準決勝では、勝者・敗者を問わずそのほとんどが平均年令を上まわっており、特に勝者が高年令にあることを示している。決勝では準決勝と同様の傾向が一層顕著になっている。

また、対戦相手別にみると、十五回の大会の準々決勝では年令上の監督が十回にわたって勝者となっており、準決勝でも十回、決勝では八回にわたって勝者となっている。特にここ数年間はそのほとんどが年令上の監督が勝者となっている。

サッカーの場合、図一五にみられるように各大会のどの回戦においても、ほぼ同様に平均年令を上下して勝者が分布している。この傾向

表-1 野球における年度別・回戦別平均年令と標準偏差値

年度		全員	1 回 戦		2 回 戦		3 回 戦		準々決勝戦		準決勝戦		決 勝 戦	
			勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負
1975	\bar{X}	42.9	38.3	40.8	43.7	43.0	43.9	43.5	45.5	42.3	44.0	47.0	41.0	47.0
	SD	8.4	6.4	4.8	10.9	7.2	7.6	14.0	3.9	10.7	4.2	4.2		
1976	\bar{X}	38.9	40.3	39.3	40.0	37.4	40.4	39.6	45.5	35.3	48.0	43.0	47.0	49.0
	SD	7.8	10.1	7.2	8.1	9.7	7.8	9.0	5.7	6.2	1.4	8.5		
1977	\bar{X}	40.0	42.9	48.0	38.0	41.1	39.6	36.4	39.0	40.3	42.5	35.5	40.0	45.0
	SD	7.2	7.4	5.1	6.6	8.7	6.4	6.8	5.0	8.3	3.5	3.5		
1978	\bar{X}	41.5	42.6	40.4	41.4	40.9	44.5	38.4	46.0	43.0	48.5	43.5	51.0	46.0
	SD	8.6	13.0	7.6	7.7	14.4	7.3	7.2	6.4	8.8	3.5	9.2		
1979	\bar{X}	43.4	42.4	44.9	39.9	45.2	40.3	38.8	38.0	42.5	32.0	44.0	29.0	35.0
	SD	9.8	7.5	10.3	6.7	10.8	6.3	7.1	7.3	5.1	4.2	0		
1980	\bar{X}	42.8	40.3	42.5	39.7	40.1	36.3	40.6	41.0	31.5	40.0	42.0	39.0	41.0
	SD	9.1	9.8	8.6	9.1	9.2	6.9	10.7	6.7	2.4	1.4	11.3		
1981	\bar{X}	42.8	43.9	37.7	42.4	43.3	44.6	40.1	47.3	42.0	49.0	45.5	55.0	43.0
	SD	6.8	6.8	5.7	8.0	5.8	7.9	7.9	8.7	7.1	8.5	12.0		
1982	\bar{X}	41.8	40.4	42.5	42.1	42.2	44.9	39.3	47.3	42.5	45.0	49.5	45.0	45.0
	SD	7.3	6.7	6.8	7.3	8.7	6.5	7.4	5.2	7.6	0	7.8		
1983	\bar{X}	42.8	45.1	42.4	42.1	44.1	40.5	43.6	47.0	34.0	53.5	40.0	59.0	48.0
	SD	7.7	7.1	6.7	9.3	9.2	11.9	6.3	9.8	16.0	7.8	7.1		
1984	\bar{X}	39.5	41.4	37.8	39.5	41.4	42.3	36.8	40.3	44.3	43.0	37.5	38.0	48.0
	SD	8.6	8.7	6.5	8.4	9.9	9.3	6.8	10.7	8.8	7.1	16.3		
1985	\bar{X}	42.4	42.8	40.9	41.3	44.9	40.8	41.9	36.3	45.3	40.5	32.0	49.0	32.0
	SD	10.1	11.3	9.2	11.1	9.7	13.2	9.3	8.5	16.8	12.0	0		
1986	\bar{X}	41.2	42.8	39.0	44.6	39.6	40.1	49.0	42.3	38.0	51.0	33.5	53.0	49.0
	SD	9.4	11.0	8.0	10.6	9.5	9.7	10.1	12.4	7.5	2.8	12.0		
1987	\bar{X}	42.5	43.2	41.9	43.3	44.2	44.1	42.5	43.5	44.8	41.5	45.2	51.0	32.0
	SD	8.8	9.4	6.8	9.7	9.9	8.8	11.1	9.3	9.6	13.4	7.8		
1988	\bar{X}	43.0	43.9	43.5	43.6	43.3	40.4	46.9	43.3	37.5	46.0	40.5	47.0	45.0
	SD	9.3	7.7	8.4	11.0	9.5	5.1	14.4	3.9	4.9	1.4	3.5		
1989	\bar{X}	41.5	41.4	43.4	41.4	42.9	39.8	42.6	45.8	33.8	51.0	40.5	53.0	49.0
	SD	9.2	8.3	10.5	7.3	9.0	8.4	6.2	7.3	4.1	2.8	6.4		

表-2 サッカーにおける年度別・回戦別平均年令値と標準偏差値

年度		全員	1 回 戦		2 回 戦		3 回 戦		準々決勝戦		準決勝戦		決 勝 戦	
			勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負
1979	\bar{X}	33.9	32.6	31.5	34.4	30.6	34.3	34.5	36.5	32.0	40.0	33.0		
	SD	6.3	4.2	8.6	2.9	4.8	4.2	1.3	4.9	2.8				
1980	\bar{X}	35.3	35.4	35.5	32.8	38.1	34.5	31.0	38.5	30.5	36.0	41.0		
	SD	6.8	5.8	7.5	6.3	4.0	5.8	7.2	3.5	4.9				
1981	\bar{X}	35.5	37.4	34.3	37.4	33.9	37.3	37.6	34.0	40.5	32.5	35.5	30.0	35.0
	SD	5.9	4.6	4.8	4.5	9.1	5.1	4.1	5.2	2.4	3.5	7.8		
1982	\bar{X}	36.4	38.3	36.2	38.8	35.6	34.3	43.3	34.5	34.0	33.0	36.0		
	SD	6.1	7.4	5.8	8.9	5.4	1.3	11.3	2.1	0				
1983	\bar{X}	37.7	35.8	35.4	38.4	35.9	37.4	38.5	39.3	35.5	39.0	39.5	44.0	34.0
	SD	7.1	7.3	6.3	6.3	8.6	5.8	6.3	4.6	7.0	7.1	3.5		
1984	\bar{X}	38.9	37.8	36.2	38.5	36.8	41.0	36.0	37.0	45.0	42.0	32.0	39.0	45.0
	SD	6.3	6.1	5.1	6.5	6.4	7.0	5.3	6.3	5.6	4.2	1.4		
1985	\bar{X}	37.4	34.3	39.8	36.6	36.8	39.1	34.0	36.5	41.8	38.5	34.5	33.0	44.0
	SD	8.3	10.1	5.3	6.3	7.3	5.7	6.2	5.2	5.6	7.8	2.1		
1986	\bar{X}	39.5	38.5	36.9	39.8	38.1	40.5	39.0	39.8	41.3	40.0	39.5	39.0	41.0
	SD	6.6	5.5	9.0	5.5	6.3	4.4	6.6	2.2	6.6	1.4	3.5		
1987	\bar{X}	39.7	39.3	42.3	38.5	40.0	39.9	36.9	38.8	41.0	41.0	36.5	42.0	40.0
	SD	7.2	6.8	7.4	6.3	7.6	7.1	5.4	8.2	6.8	1.4	13.4		
1988	\bar{X}	36.9	40.7	41.1	38.7	41.3	37.4	40.0	33.0	41.1	32.0	34.0	36.0	28.0
	SD	7.5	6.9	8.4	7.5	6.7	5.9	9.0	3.5	4.3	5.7	0		
1989	\bar{X}	40.6	40.6	39.1	40.4	39.1	40.4	40.3	44.8	36.0	41.5	42.0	37.0	46.0
	SD	8.1	9.1	7.6	7.5	9.7	6.9	8.7	5.3	5.6	6.4	9.9		

表-3 ラグビーにおける年度別・回戦別平均年令値と標準偏差値

年度		全員	1 回 戦		2 回 戦		3 回 戦		準々決勝戦		準決勝戦		決 勝 戦	
			勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負	勝	負
1985	\bar{X}	39.6	40.5	37.6	40.4	40.8	43.6	37.1	45.8	41.5	42.0	49.5	37.0	47.0
	SD	6.9	6.7	5.2	8.7	6.7	7.4	9.1	9.1	5.8	7.1	12.0		
1986	\bar{X}	39.5	35.8	40.5	41.4	36.7	41.9	40.9	47.0	36.8	40.5	53.5	39.0	42.0
	SD	7.2	6.3	6.4	7.5	7.2	8.6	6.8	8.8	5.0	2.1	7.8		
1987	\bar{X}	40.7	38.7	42.9	40.6	38.7	45.9	35.3	47.8	44.0	55.0	40.5	50.0	60.0
	SD	7.2	5.4	6.9	9.3	4.2	8.3	7.2	11.8	5.3	7.1	10.3		
1988	\bar{X}	40.6	41.9	40.6	39.1	42.3	36.8	41.4	39.0	34.5	38.5	39.5	26.0	51.0
	SD	6.5	6.4	5.7	7.5	6.3	8.5	6.0	10.6	6.6	17.7	4.9		
1989	\bar{X}	41.0	42.7	39.9	40.8	41.8	38.8	44.0	43.8	33.8	43.0	44.5	36.0	50.0
	SD	6.5	5.2	5.7	7.3	6.2	8.0	7.0	7.8	4.6	9.9	9.2		

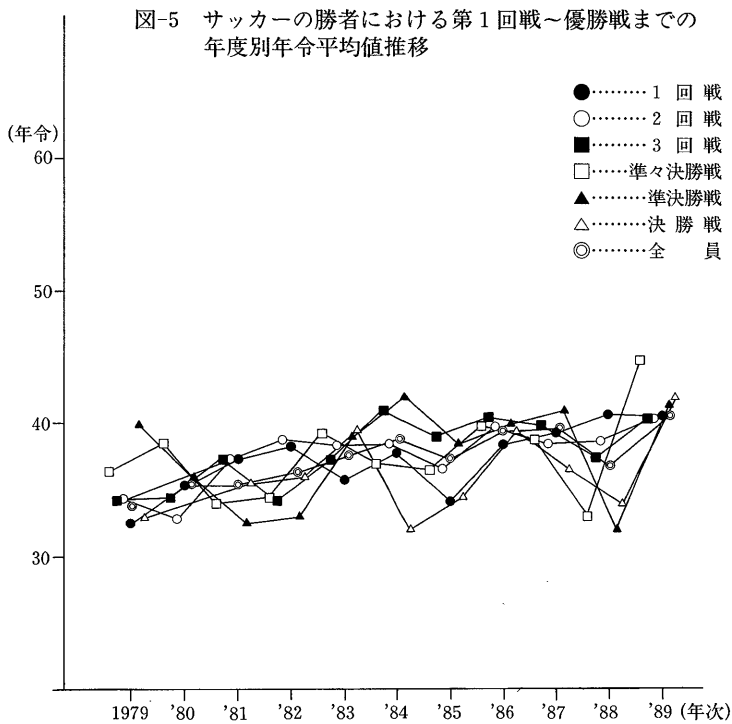
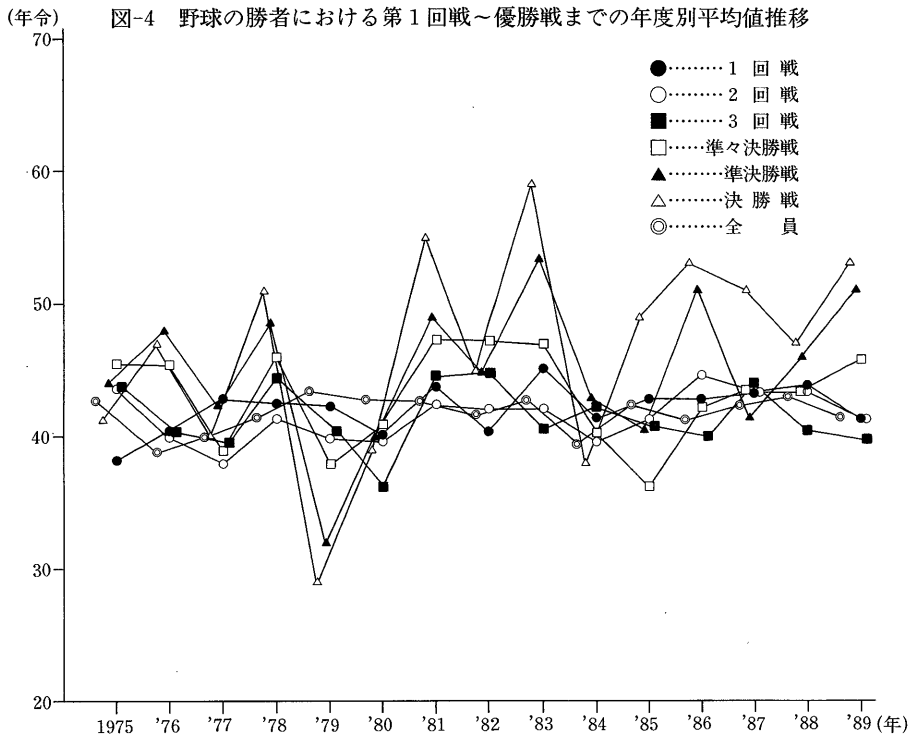


図-6 ラグビーの勝者における第1回戦～優勝戦までの年度別年齢平均値推移

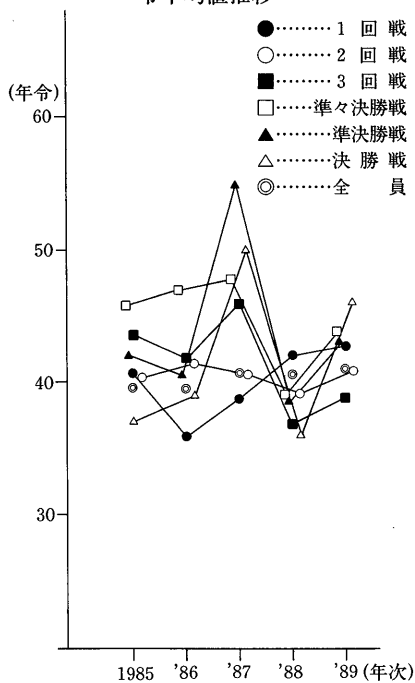
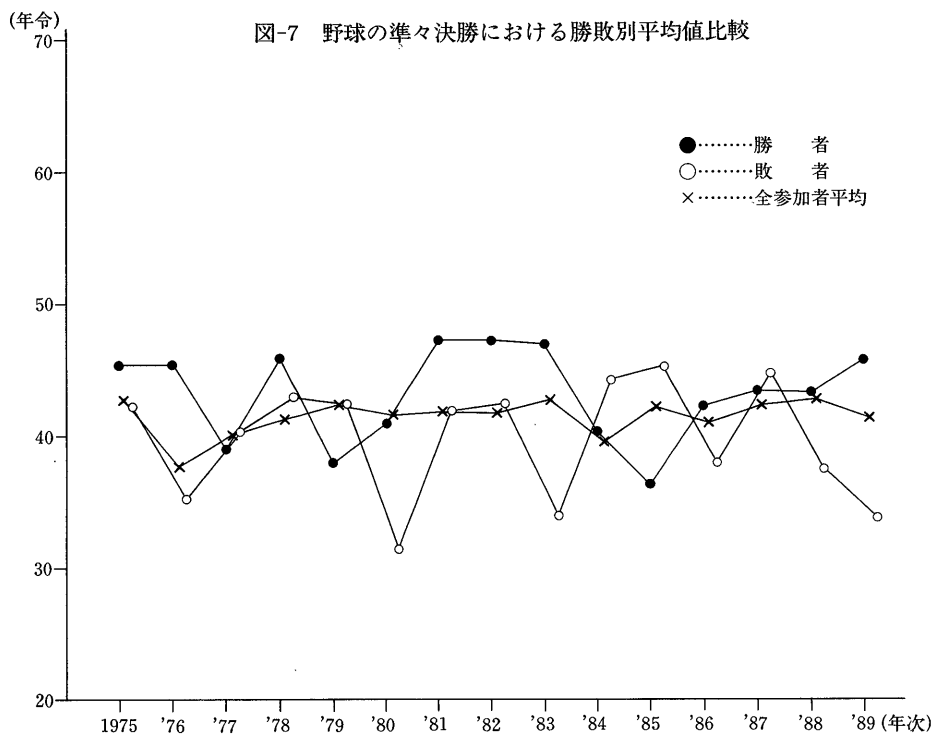


図-7 野球の準々決勝における勝敗別平均値比較



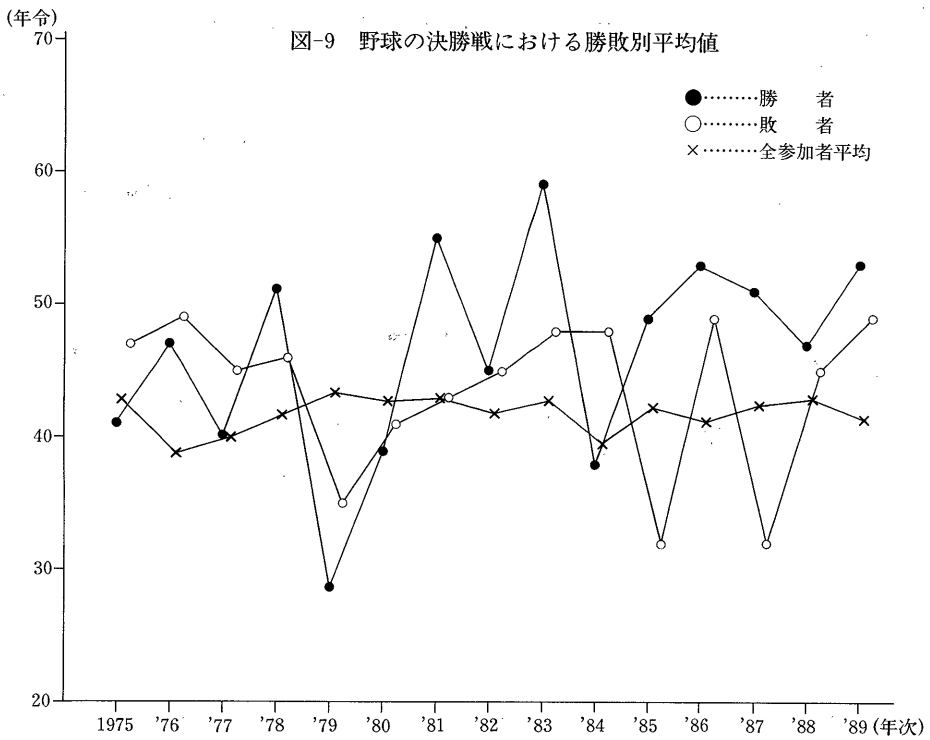
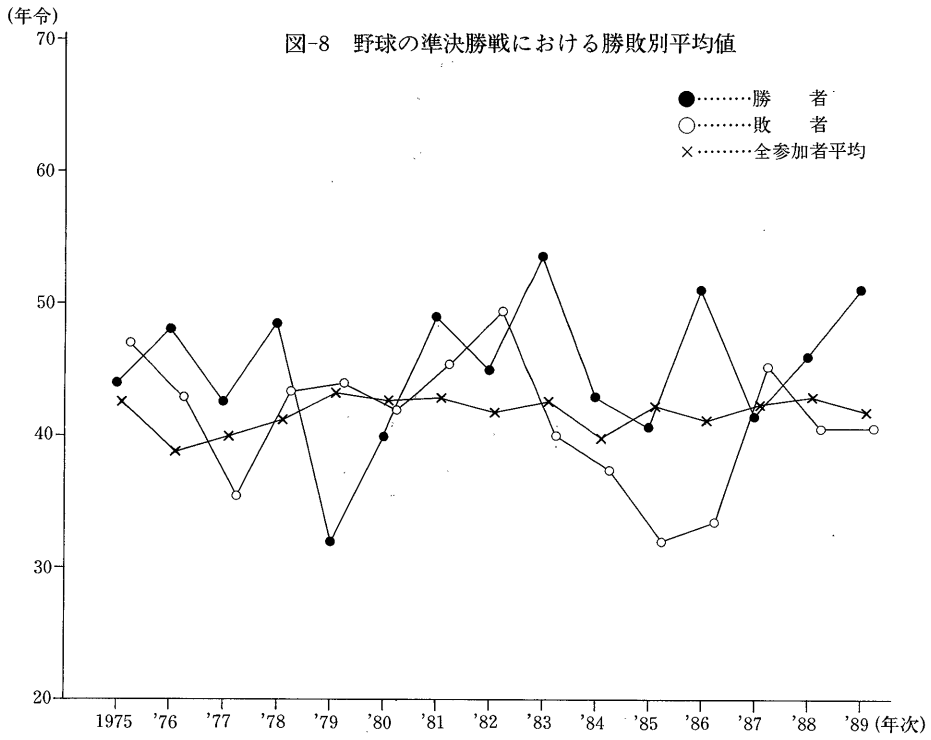


図-10 サッカーの準々決勝における勝敗別平均年齢値比較

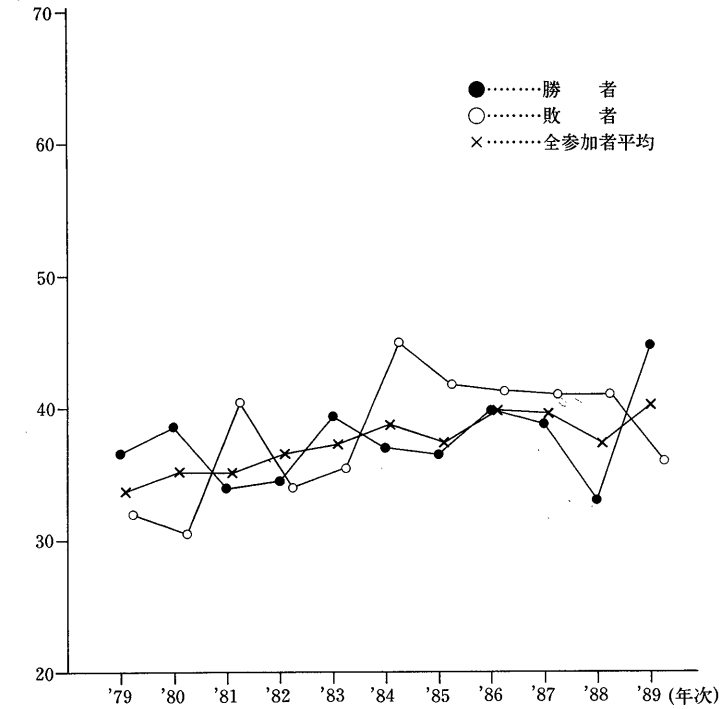


図-11 サッカーの準決勝における勝敗別平均年齢値比較

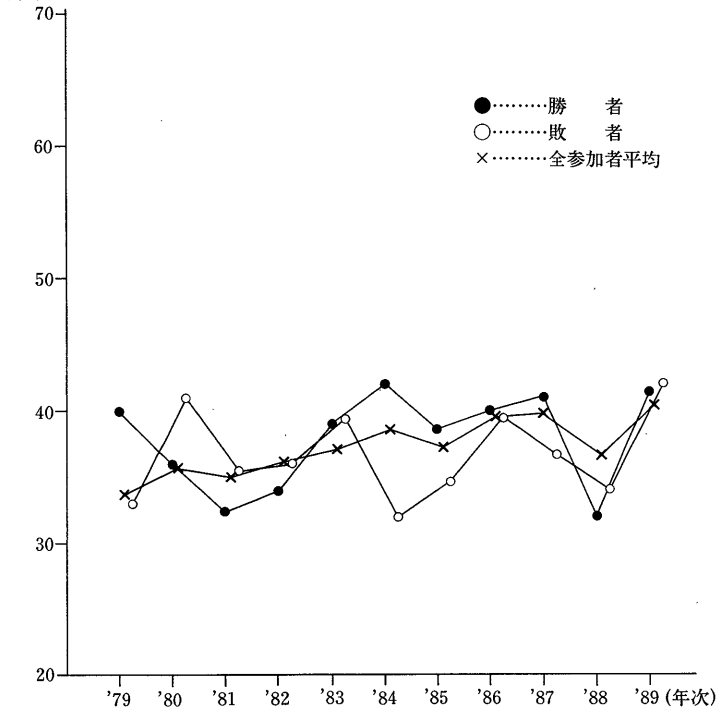


図-12 サッカーの決勝戦における勝敗別平均年齢値比較

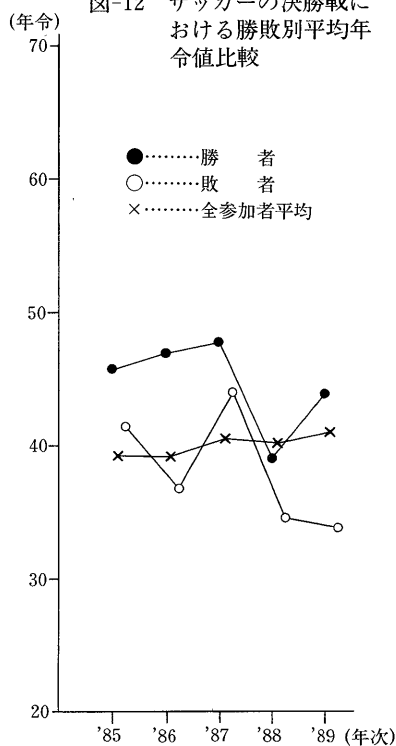


図-13 ラグビーの準々決勝における勝敗別平均年齢値比較

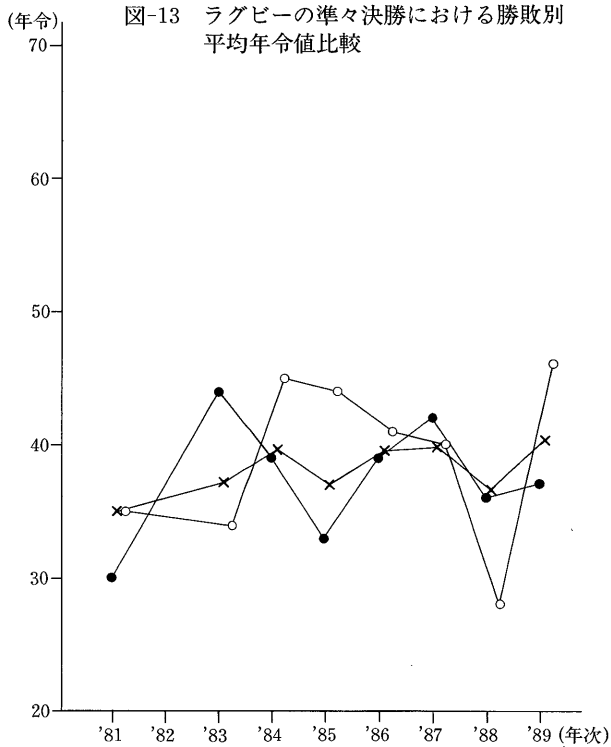


図-14 ラグビーの準決勝における勝敗別平均年齢値比較

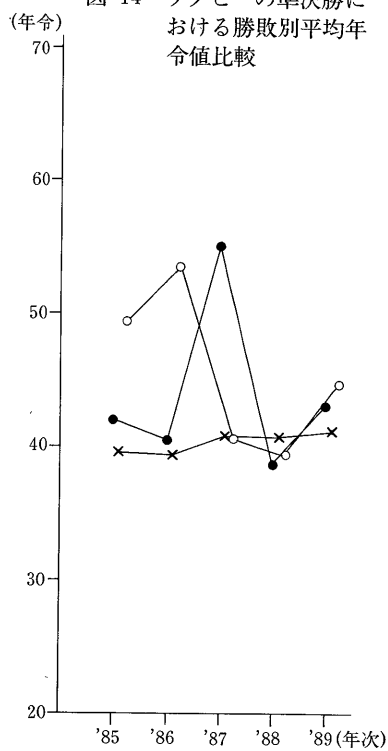
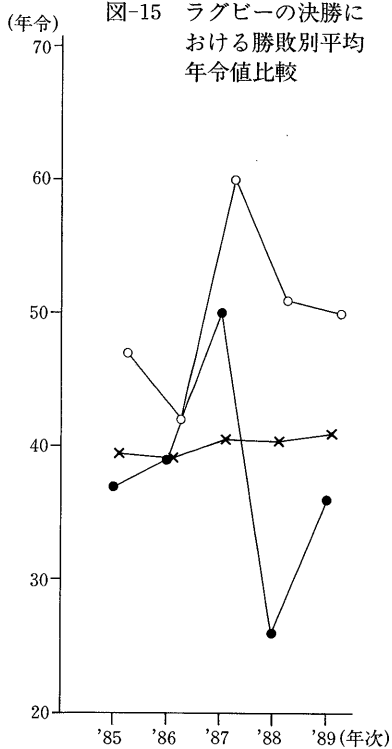


図-15 ラグビーの決勝における勝敗別平均年齢値比較



を顕著に表しているのが準々決勝(図一〇)にみる事ができる。

また、対戦相手別にみると、十一回の大会の準々決勝では、年令の下
の監督が六回、準決勝では六回、決勝でも六回にわたって勝者になっ
ており、年上の監督と年下の監督が勝者になる確立はきつ抗している。

ラグビーの場合、図一六にみられるように全体的にサッカーと同様
な傾向を示している。ただ対戦相手別の勝敗をみると、準々決勝、準
決勝、決勝とも一例を除き年令の下
の監督が勝者になっている。これ
は野球の場合とは正反対の傾向を示したことになる。

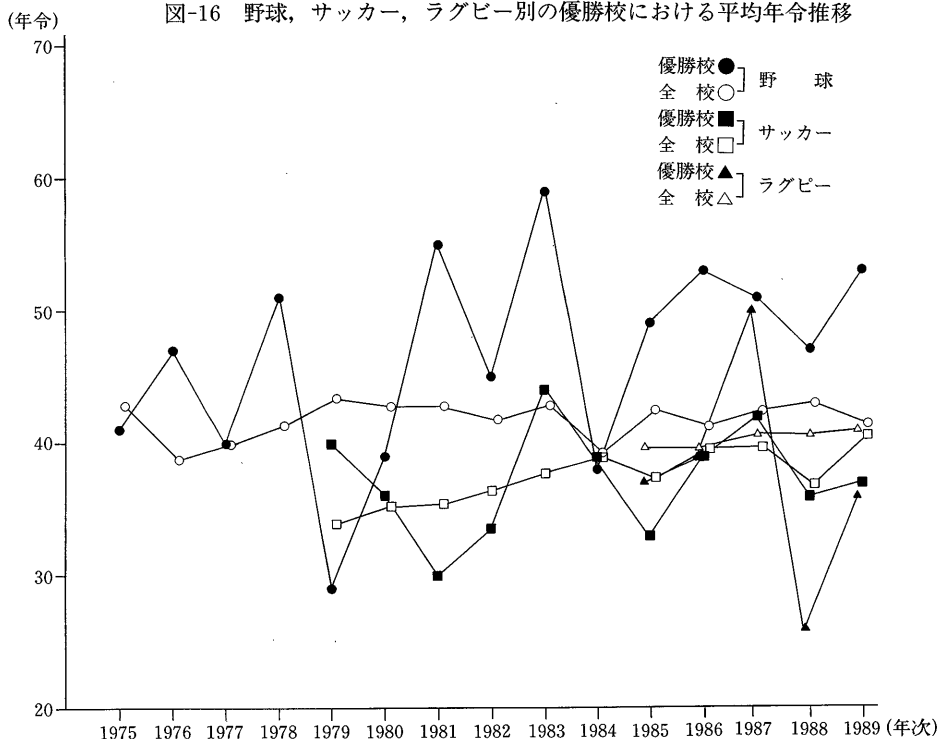
次に優勝チームを引き入る監督の年令と同監督が指導に当たっている
間に、全国大会でベスト4以上の成績を収めた状況についてみてみる
と、野球・サッカー・ラグビーの競技間に差異のあることが証明され
る。(図一六)

野球の場合、優勝監督の年令は総参加監督の平均年令を11/15の割
合で上回っており、その年令も50才より高い人が6人、39才より低い
人が3人、40才台は6人となっている。優勝監督の平均年令は47・1
才であり、高校生スポーツの指導者としては相当に高年令指導者がそ
の榮譽に欲しているとみることができる。特に50才台の監督が6人と
多いのも特筆すべき事象である。

また、これらの監督が連続してどの程度の成績を残しているかにつ
いて、各監督を個別に追跡調査をした結果、野球に限ってはそれほど
んどが連続して好成績(ベスト4以上の成績)をあげたり、間歇的で
も好成績をあげている例は非常に少ない。ごく少数の例でみると工校
の例で○×××○×○×(○印はベスト4以上)で5年間にわたつ

現代の体育・スポーツの指導者とその在り方への提言

図-16 野球，サッカー，ラグビー別の優勝校における平均年令推移



て優秀な成績をあげたのと、P校が〇―×―〇―〇―〇―×―〇と延べ7年間にわたって好成績をあげた例とがある。しかしこの場合は、前の2年間と後の5年間とで指導者（監督）が変わっているの、やはりこの場合も5年間にわたって優秀な成績をあげたことになる。このように伝統校で連続して出場している高校であっても、その指導者が優秀な成績をあげることでできる期間は、最長でも5ヵ年程度であることを明らかにしている。

サッカーの場合、優勝監督の年令は総参加監督の平均年を7/11の割合で下回っており、そのそれぞれの年令は30才―44才の間となっているとともに40才以上は2/11名となっている。優勝監督の平均年令は37・7才となっている。

また、これらの監督が連続してどの程度の成績（ベスト4以上）を残しているかについて追跡的に調査してみると、N校〇―〇―〇―〇―〇―〇と5ヵ年連続してベスト4以上になっており、33才―37才にわたって活躍している。しかしその後の参加はみられない。S校では〇―×―〇―〇と4ヵ年間にわたって活躍したその年令は31才―34才であった。T校では〇―×―×―〇―〇―〇と6ヵ年間にわたって活躍をしており、その年令は40才―45才であった。その他F校では〇―〇、I.校でも〇―〇などの例もある。このことから一例に限り6ヵ年間連続というケースがあるが、その他はすべて5ヵ年連続かそれ以下のケースである。ただ、サッカーの場合は野球のケースと違い比較的多くの連続出場を達成し、かつ優秀な成績をあげている。

ラグビーの場合、優勝監督の年令は総参加監督の平均年令を4/5

の割合で下回っている。特に50才で優勝監督になった一例を除き、平均年令より相当下回っている。優勝監督の平均年令は37・4才であるが、一例の50才監督を除けば34・2才となる。即ち4/5の割合で40才以下の監督が優勝チームを育てあげたこととなっている。

三、考察

全国大会に参加するためには、それぞれの都道府県で優勝するか、地域ブロックで優秀な成績をあげる必要がある。しかし、参加することへの成績もさることながら、それらのチームが一堂に会した全国大会で優勝したり優秀な成績を残すことはもっと至難なことである。この至難な偉業を達成するためには、多様な要素が凝縮された時にこそ可能なことであり、それを一つのもの（チーム）にまとめあげることには必ずしも指導者（監督）ひとりで達成されるものではないといえる。チームの構成員である選手の資質、学業をはじめ選手を取りまく高校生の生活全体の物心にわたる環境、十分な練習をするための施設や経費等の問題のあることは言うに及ばないが、最近ではこれらの諸条件が同じ水準程度かそれ以上の水準にあるチームも多いことから、今回は指導者のみに焦点を当てるとともに、特に今回は年令を中心に分析的研究をしたものである。

参加全監督のそれぞれの年令とその平均、準々決勝、準決勝、決勝へと勝ち進んだ優秀なチームを率いる監督の年令・その時の対戦相手監督の年令との対比、連続して優秀な成績を残した監督の年令の追跡的な調査等を実施し、それぞれに概要の分析を前項で行ったところで

あるが、ここでは相互に関連し合っている事象の究明する。

① 全国大会への参加監督の平均年令を高い競技順から見ると、野球では47・1才であり、サッカーでは37・7才、ラグビーで34・7才と大きな開きがみられた。このような野球VサッカーVラグビーの平均年令の違いの中には、多くて大きい三者間の差違を内包している。野球では、中等学校時代からの長い歴史の上に立って、現在では硬式野球のない男子生徒在学校はないと言われるまで普及し、その活動、指導者（監督）の確保についても安定したものを備えているとともに、その交替等も順調に進んでいる結果、監督平均年令は高いが、毎年度一定の平均年令となつて表われるものと推測される。サッカーでは、各高等学校での部活動が広くしかも安定して展開されるようになったのは昭和30年台の後半からであり、末だ歴史としては浅い。この歴史の浅いことが若い指導者（監督）を受け入れる余地となり、監督の平均年令が若くなっている。しかし、漸次その平均年令に高まりがあり、ある程度まではこの傾向が続くのではないかと思料さる。ラグビーの場合は、サッカー以上にサッカーと同様の要素を持っているといえる。その結果が平均年令をより若くしていると判断できる。

② 野球では参加全監督の平均年令の安定していることは先に述べたが、対戦成績でみると、一回戦、二回戦……準決勝、決勝へと勝ち進むに従つて、年令の高い監督が勝者になっているケースが多い。特に準々決勝以後の各対戦ではこの傾向が強い。一九八一年以降の優勝監督は一例を除きすべて45才以上であり、漸次年令が広まる傾向がある。一方サッカーやラグビーでは、この逆の現象がみられ、一般に対

戦が進むに従つて若い監督が勝者となるケースが多い。しかし、サッカーに於いては、年下の監督が勝者にはなるが、漸次その年令が高まりつつあることをしめしている。ラグビーは資料も少ないことから明確な傾向を示し得ないが年下勝者の傾向ははっきりしている。

③ 次に一人の指導者がどの程度の期間、優秀な成績を残すのかについて、全国的な大会で優勝経験のある指導者（監督）を中心に追跡的に調査してみた。先の分析の項でも述べたように、それぞれの競技種目には若干の差異があるとともに、一面では共通の事象も備えている。

特に、一人の指導者（監督）がどの程度の期間、優秀な成績を残すことができるかについては、競技種目によつて多少の違いはあるがほぼ同様の傾向を示すことが明らかになった。「あの人は、何時、何時に日本一のチームを育成したから必ずその気になれば、改めて優秀なチームを、いずれ日本一のチームを。」というのは、必ずしも的を得ないことがこの分析結果から料り知ることができる。即ち、高校生スポーツにおいて、優秀（この場合、ベスト4以上のチームの育成のことをいう）なチームの育成は、ひとりの優秀な指導者によつてのみ達成されるものではなく、優秀な指導者にもその機能を、そしてその全知全能を発揮できる期間には、限度のあることをこの分析結果は証明している。超一流校と言われる伝統校であっても、その全盛期が5カ年以上にわたると、指導者（監督）に交代があり、その伝統を引き継いでいることになる。これらのことは、野球、サッカー、ラグビーを問わず明らかになっている。

これらのことから全国大会で優秀な成績を残す監督は、そのピークを最長5カ年程度と見込み、一度日本一を育成したからと言って、いつまでも優秀なチームを育成する資質や能力を持っているのではないかとの思いは幻想であると言ってもよい。この分岐点がスポーツ指導者としても大切な分岐点であり、わが国スポーツ界のこれからの展望を開く大切な点を象徴していると言っても過ぎないのではないかと思う。勝ったからと言って、いつまでも勝てるという指導資質ではないということを確認に物語っていると言えよう。

以上のことから、優秀な指導者がいついつまでも優秀な指導者でないことを明らかにしているといえる。

高等学校における指導者は、高校生の心情やそのチームの状況を把握して優秀と称されるチームに仕上げるには、指導者（監督）にもその時々合った資質が求められていることを明らかにしている。

スポーツは、今後も民衆の心をとらえることとなろうが、そのスポーツの優秀なチームを作りあげる指導者（監督）には、年令的にも大きな要因のあることを明らかにできたと思う。